

Aria - 大分音楽幻想 -

「大分と音楽」というキーワードでお話しをさせていただくことになった。私自身音楽家でもないし、音楽の勉強をしたわけでもない。私の養父である中山悌一らが始めた声楽家団体の仕事を任されて、ビジネスの世界から音楽の世界に入ったので、話題はいささかあちこちに飛ぶことになりそうだ。読者のみなさまにはあらかじめご容赦をお願いしておく。

大分には、宇佐八幡宮という八幡信仰の総本山があり、国東半島には六郷満山文化があることをみても、奈良時代以来、我が国でも有数の文化が集約していたことは間違いない。六郷満山とは、国東半島の主峰両子山の山麓で分かれていた六つの郷が語源となっており、天台系の修験道場として多くの寺が散在している。その宇佐八幡宮と六郷満山により、神道・仏教の混淆というかたちで、独特な文化が形成された。

その為、この地方では当然のこととして、天台宗の「聲明」が伝えられている。最近もiichiko総合文化センターでレクチャーと実演をお願いした。

「聲明」を音楽と捉えるのは飛躍があるとお思いかもしれないが、救いの祈りがこのような「歌う」という形で人々の間に認められてきた歴史は、西欧の中世におけるグレゴリオ聖歌と一脈通じるものがある。

大分は、戦国時代に大友宗麟が支配していた。キリスト教の布教に訪れたポルトガルの宣教師達を保護し、自らもキリスト教に帰依するようになった。フランシスコ・ザビエルをはじめとするイエズス会の神父達によって、先進文化が大分の地にもたらされた。病院、学校、教会などの他に、教会で歌う歌（まさにグレゴリオ聖歌）や楽器もあった。

当時、西洋で作られた世界地図の九州に当たる場所にBUNGOと書かれているのは良く知られており、当時の豊後、大分は屈指の国際都市として繁栄し、広く海外にも知られた場所だったことがわかる。このように大分は古代から我が国でも特異な発展を遂げた場所であり、西洋音楽と日本の古来の音楽が共存した希有な場所となった。

大分市内の中央部にある遊歩公園に「西欧音楽発祥の地」と題する大きなレリーフとヴィオラを弾く神父の銅像が建っている。その同じ公園には「瀧廉太郎終焉の地」と朝倉文夫作になる瀧廉太郎の像が建っている。彼は23歳という短い人生で、「荒城の月」、「花」、「箱根八里」など、今も歌い継がれている名曲を作曲したのは驚異に値する。

さらに、大正、昭和になると、西洋音楽が広く普及して、オペラという西洋起源の音楽劇も入って来た。この分野で今でも続く団体が二つある。その設立の中心となった二人がどちらも大分県に所縁があるのが面白い。一人は藤原歌劇団を創設した藤原義江、もう一人が二期会の中山悌一である。そして、そのオペラをTVという新しいメディアを通じて広く普及させたのが立川澄人（後に清登に改名）。ピアノにも巨匠が現れた。父親が大分出身の園田高弘である。彼の名を冠したピアノコンクール、そして瀧廉太郎の名を冠した全日本高校声楽コンクールは、その道に進む若者達にとって、重要な登竜門の一つである。

世界的なピアニスト、マルタ・アルゲリッチが毎年別府を訪れて、親しい仲間を呼んで開く音楽祭も特筆ものだ。彼女は仕事で別府に来るのではなく楽しみに来るといわれるように、舞台もリラックスして生き生きしているように見える。「なぜ別府か？」は、またの機会に話すことにしよう。

次回以降、これらパワースポットを形成する話題を、私流のやぶにらみ音楽談義としてご紹介していくことにしたい。乞うご期待！

中山 欽吾



中山 欽吾 (なかやま きんご)
iichiko総合文化センター館長
公益財団法人大分県文化スポーツ振興財団理事
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長
公益財団法人東京二期会常務理事

大分県大分市出身。大分上野丘高校から九州大学工学部卒業後、三井金属鉱業(株)に入社。三井金属(米国)株式会社社長を経て、1997年、バリトン歌手で養父でもある中山悌一氏の強い要請で、「二期会」(オペラや声学全般の振興を図る団体)に転身。2008年10月、大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長に就任した。



富貴寺(筆者スケッチ)



天台宗「聲明」



西欧音楽発祥の地